

■高病原性鳥インフルエンザ H5N1（WHO、インドネシア政府およびオーストラリア国立大学の共同研究）

Emerging Infectious Diseases, Vol 16, Number 12-Dec 2010

Environmental Sampling for Avian Influenza Virus A (H5N1) in Live-Bird Markets,

Indonesia Indriani,R., et al., <http://www.cdc.gov/eid/content/16/12/1889.htm>

<概要>

インドネシア、ジャワ島西部（ジャカルタ周辺を含む）の 3 地域で 83 の生鳥マーケット（live-bird markets, LBMs）を調査。それぞれのマーケットで水場、床、死んだニワトリを運ぶ籠、使用するナイフなど環境のサンプル（拭い液）を採取、RT-PCR で H5N1 ウイルス遺伝子を検出できるか調べた。

対象とした地域には 300 もの LBMs が存在し、かつ 2001 年の調査で H5N1 混入の可能性が 50 %と推定されている。さらに、調査時期を 2007 年 10 月から 2008 年 3 月とし、雨期で H5N1 アウトブレイクの報告数が多い時期を選んだ。

まず、42 項目からなるアンケートを作成し、売買規模やインフラなどについての情報を収集した。回答は、インドネシア保健省行政官、WHO 疫学者、FAO 獣疫学者、インドネシア農業省の獣医師からなるチームによって検証され、その結果と同チームによる実地観察により、サンプリングする市場（恒常的に鳥インフルエンザウイルスが混入していると思われる）を選定した。

サンプリング対象として選んだ 83 の LBMs のうち 62 は都市部（31 はジャカルタ）、21 は地方部に位置した。39 か所（47%）からウイルス混入の証拠が得られ、そのうち 22 か所においては、6 以上の環境サンプルから H5N1 遺伝子が検出された。屠殺処理場であることとジャワ西部地域に位置する、という点がリスクファクターとして挙げられた。プロテクティブファクターとして、毎日のゴミ処理や家禽関連施設を隔離する都市計画が重要であることが示され、今後の対策デザインに生かすことが出来る結果が得られた。